

・第23回の勉強範囲：「第一章 師と弟子」3頁

・□ (読む) 「師と弟子」 3頁最初～下段L7

一八八二年三月

Mがはじめてシュリー・ラーマクリシュナにお目にかかったのは、ある春の日曜日、師の誕生日の数日後であった。シュリー・ラーマクリシュナはカーリーバリ、つまりガンガー河岸ドッキネッショルにある母カーリーの寺院に住んでおられた。

Mは、日曜日はひまなので、友人のシドゥとともにボラノゴルにあるいくつかの庭園を訪れたのだった。プラサンナ・バネルジの庭園を歩いている時、シドゥが言った、「ガンガーの岸に一人のパラマハンサが住んでいる美しい所があるのだよ。君、行きたいか」Mは同意し、二人はすぐにドッキネッショル寺院に向かった。彼らは夕暮れに正門に着き、まっすぐにシュリー・ラーマクリシュナの部屋に行った。そしてそこに、彼が東に向き、木の寝椅子にすわっておられるのを見た。顔に微笑をたたえて、彼は神のことを話しておいでになった。部屋は人でいっぱい、皆が床にすわり、深い沈黙のうちに彼の言葉に聞きほれていた。

Mは言葉を忘れてそこに立ち、そして眺めた。まるですべての聖地が一緒になったところに立ったかのよう、そしてまるでシュカデーヴァその人が神の言葉を語っているか、シュリー・チャイタンニヤがプリでラーマナンダやスワループをはじめとする信者たちとともに、主の御名と栄光を歌っているかのようだった。

(解説)

Mさんの初めてのドッキネッショル来訪

(1) 来訪のきっかけ

マスター・マハーシャヤ (Mさん) (注1)は学校の先生でしたから、日曜日はお休みでした。彼は詩人のようでしたので自然が好きでした。ボラノゴルに住んでいる甥のシドゥに誘われて、軽い気持ちでドッキネッショルに行きました。

それより前から彼はブラーフモー・サマージの指導者であるケシャブ・チャンドラ・センの雑誌のシュリー・ラーマクリシュナの記事を読んでいたもので、シュリー・ラーマクリシュナのことは知っていました。しかしあまり興味がなかった。

(2) ドッキネッショルでのシュリー・ラーマクリシュナの印象

マスター・マハーシャヤが初めてドッキネッショルを訪ねて何を見ましたか？

ベッドが二つありました。ひとつは寝るため、もうひとつはすわるためです。シュリー・ラーマクリシュナはベッドにすわって微笑みながら、神様のことを話していました。信者たちは床にすわって話を聞いていました。昔からの習慣でお坊さんとは一緒にすわりません。

マスター・マハーシャヤはヴィシュヌ派の信者でしたので、シュリー・ラーマクリシュナに会って、ガウラーンガ、シュリー・チャイタンニヤ (注2) のイメージが出ました。シュリー・チャイタンニヤは 400 年くらい前、1400 年代の方で、聖典の中にシュリー・チャイタンニヤの話がいろいろでているのでそのイメージが出ました。

それからもうひとり、シュカデーヴァ (注3) のイメージも出ました。シュカデーヴァのお父さんはヴィヤーサです。ヴィヤーサはマハーバーラタを作り、それだけではなくウパニシャッドのひとつ、有名な哲学の聖典、ヴェーダーンタ哲学のテキストを作りました。昔のインドの聖者の物語はいろいろありますが、その中で一番有名なのはシュカデーヴァです。

シュリー・チャイタンニヤとシュカデーヴァ。両方ともとても高いレベルのお坊さん、聖者です。

ブラーフモー・サマージ (☞ 『ラーマクリシュナの福音』序論 p (84))

(1) ブラーフモー・サマージの変遷

ブラーフモー・サマージの運動を始めた人はラームモハン・ロイです。そしてブラーフモー・サマージという組織を始めた人は、デヴェンドラナート・タゴールです。彼は詩人のラビンドラナート・タゴール (* ノーベル文学賞受賞者) のお父さんでもあります。

意見の違いからブラーフモー・サマージは分かれ、シュリー・ラーマクリシュナの頃には 3 つのブラーフモー・サマージがありました。福音の中にも何回もブラーフモー・サマージのメンバーが出てきますが、みんな別々の協会に属していました。

- ・アーディ・ブラーフモー・サマージは一番最初からのブラーフモー・サマージです。
- ・ケシャブ・チャンドラ・センは新しくナヴァヴィダーン (* 「新摂理」という意味) を作り、トライロキヤ、プラタープもそのメンバーでした。

・シャーダーロン・ブラーフモー・サマージのメンバーには、ヴィジョイ・クリシュナ・ゴースワミー、シヴァナート・シャーストリーがいました。スワミージーもシュリー・ラーマクリシュナのところに来る前はシャーダーロン・ブラーフモー・サマージのメンバーでした。

(2) ブラーフモー・サマージの思想とヒンドゥ教の違い

◎ブラーフモー・サマージの考え

形が無いが、性質があるサグナ・ブラフマンのことを考える。

そのブラフマンが好きで、ブラフマンのことを考える、瞑想する。

全て、ブラフマンからブラフマンが出ています。

ブラーフモー・サマージのメンバーはいつも「ブラフマ、ブラフマ」と唱えていました。

礼拝はありません。

サマージは『協会』という意味です。

ヒンドゥ教とブラーフモー・サマージでは3つのポイントが違います。

◎ヒンドゥ教の考え

① 形、性質のある神を礼拝します。(シヴァ、ドゥルガーなど)

② 神の化身、アヴァターラを信じています。

(シュリー・チャイタンニヤ、クリシュナ、ラーマなど)

③ グル。霊的な実践のためにグルが必要だと考えます。

(信者はグルは人間だが神様のようだと考える)

ブラーフモー・サマージのメンバーのほとんどは、もとはヒンドゥ教徒でしたが、これら3つのポイントに反対していました。

西洋の教育の影響で、ヒンドゥ教の教えを『迷信ですべて間違い』だと考えていたからです。

(3) ブラーフモー・サマージとシュリー・ラーマクリシュナ

ブラーフモー・サマージの信者の中で最初にシュリー・ラーマクリシュナにあったのは大指導者であるケシャブ・チャンドラ・センです。彼は自分の霊的なレベルが高かったので、シュリー・ラーマクリシュナが本当はマザー・カーリーの礼拝者であるだけでなく、素晴らしい方だとすぐに分かりました。そしてとても尊敬するようになりました。

シュリー・ラーマクリシュナはヒンドゥ教徒で、マザー・カーリーを礼拝し、神の化身、アヴァターラを信じ、グルが必要でした。ケシャブ・チャンドラ・センはブラーフモーでしたが、ヒンドゥ教徒の中に素晴らしい人がいると感動して、雑誌に書いたのです。

それ以来、コルカタからたくさんの方がシュリー・ラーマクリシュナに会いに来るようになりました。なぜならケシャブ・チャンドラ・センはとても有名でしたので、その方が尊敬している偉大な方がどんな方なのか、みんな知りたかったからです。

シュリー・ラーマクリシュナは 1853 年くらいからずっとドッキネッショルに住んでいましたが、ケシャブ・チャンドラ・センが雑誌で紹介するまではほとんど誰も彼のことを知りませんでした。

□ (読む) 3 頁 下段 8 行目～16 行目

シュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「ハリかラーマの御名を一度聞いたら涙が流れ、髪が逆立つようになったら、もう自分はサンディヤーのようなお勤めはしないでもよいと思ってよろしい。そうなったときにはじめて、人は儀式を捨てる権利を得た、というよりむしろ、儀式の方がおのずから去ってしまうのだ。そのときには、ラーマかハリの御名をとえさえすれば、またはただのオームをとえただけでも、十分であろう」つづいて、彼はおっしゃった、「サンディヤーはガーヤットリーの中に、そしてガーヤットリーはオームの中に呑みこまれてしまうのだ」

(解説)

神様への深い愛の印^{しるし}

(1) 肉体的な印

「ハリ」、「ラーマ」など、神様の名前を一回唱えただけで神様への愛が大きく深くなり、涙が出て、髪が逆立ちます。これは本当に深いエモーションです。このような肉体的^{しるし}印が出るようになりますと、もう儀式はいりません。なぜなら儀式は神様への愛を増やすために行うのですから、これほどの愛を持つと儀式をする必要はなくなります。

ふつう、神様のことを聞いて涙が出ることはありますが、それとは全然違います。

(2) サンディヤーからガーヤットリーへ、ガーヤットリーからオームへ

(☞ 『福音』 p685 など)

①サンディヤーとは、インド社会の上位三階級の聖糸を受けた男子が、定められた期間毎日行うことになっている礼拝のことです。(『福音』の解説より)

ブラーミン(*祭司)は毎日朝と晩の二回必ずいろいろなマントラを唱えなければなりません。その中には儀式もあるので大体 20 分くらいかかります。ブラーミンはその儀式をしないと罪を犯すことになります。 目的は神様への愛を増やすことです。

→サンディヤーの実践を続けて神様への愛が増えると、サンディヤーの儀式は必要なくなります。

②ガーヤットリー。ガーヤットリー・マントラは短いですね。マントラを唱える前に儀式もあまりありません。

→ガーヤットリーを唱え、さらに神様への愛が増えると、ガーヤットリーも必要なくなります。

③オームだけを唱える。

→オーム、または「ハリ」、「ラーマ」などの神様の名前を唱えるだけで、神様に対する深い愛が出るようになります。

これほどの愛を持つと、儀式は必要なくなります。

サンディヤーはガーヤットリーに入り、ガーヤットリーはオームに入ります。

□ (読む) 3頁 下段 17行目～21行目

Mは驚嘆してあたりを見回し、心に思った、「なんという美しいところだろう！ なんという魅力のある人だろう！ 何というすばらしいことを言われるのだろう！ もうここから動きたくない」数分後に、彼は考えた、「まずこの場所を見てこようか。それからまたここに戻ってきてすわろう」

(解説)

Mさんはシュリー・ラーマクリシュナをととても素晴らしい方だと考えていましたが、初めての訪問ではその考えが中心とはなりません。Mさんはまだ、神のほか風景や自然にも同様に興味を持っていたのです。あとになってMさんの興味の対象は、神様だけ、シュリー・ラーマクリシュナだけとなりました。

□ (読む) 3頁 下段 22行目～4頁上段

シドゥとともに部屋を出ると、どら、鐘、太鼓およびシンバルからなる美しいアラテーの音楽が聖堂から聞こえてきた。音楽は境内の南端にあるナハバトからもきこえてきた。その響きはガンガーの河面を渡り、はるかかなたに消えていった。花の香を含んだ柔らかい春風が吹き、月はいま昇りはじめたところだった。まるで自然と人とがともにアラテーの準備をしつつあるかのようにだった。Mとシドゥとは

十二のシヴァ聖堂、ラーダー・カンタ聖堂およびバヴァターリニの聖堂に詣った。
もろもろの神像の前で行われる礼拝を見ていると、Mの心は喜びに満たされた。

『福音』勉強会第23回、以上)

- (注1) (☞ 『ラーマクリシュナの福音』序論(P99))
Mさんとして知られる『ラーマクリシュナの福音』の著者マヘンドラナート・グプタのこと。マスター・マハーシャヤは敬称。
- (注2) 1485年ベンガルに生まれた預言者の名。ナヴァディープに住み、悟りへの道として、バクティ、信愛の道を強調した。ガウラーンガ、ガウル、ゴーラー、ニマイなどとよばれる。
- (注3) ヴィヤーサの息子。バーガヴァタムの語り手(著者)。インドの理想的な僧の一人とされている。